

『伊勢物語』第二十二段考

―「うきながら」の歌を中心に―

伊牟田 經久

はじめに

『伊勢物語』は、歌を中核とし、すべてを歌に収斂する物語であるから、地の文はそれにかかわる最小限の状況を表現するだけである。したがって、物語中の人物の心理はもちろん、細かな経緯や事情について描かれることは極めて稀であり、多くは読み手の想像に任されるために、いろいろな解釈を生み出す余地が大である。

しかし、読み手の想像といっても、全く自由に任されているのではなく、そこに表現されていること（ことば）を手がかりにして広げられるものであるから、ことばの理解が正しくなければ、物語の真意とは異なる解釈が導かれることになる。

ここに取り上げようとする『伊勢物語』第二十二段に

ついで、森本茂氏は次のように述べておられる。

この段や前段のように、振幅のはげしい夫婦物語になると、説明が足りないために物語作者の意図がとらえにくく、さまざまな解釈上の異説を生む結果になる。

確かに「説明が足りない」こともあるが、形容詞「うし」や「はかなし」の語義の理解が適切でなく、勘に頼って解釈してきたところにも問題があると考えられるので、そこに焦点を置きながら再検討を試みたい。

一 「うきながら」のこれまでの解
まず、全文を引用しよう。⁽¹⁾⁽²⁾

むかし、はかなくて絶えにける仲、なほや忘れざり
けむ、女のもとより、

うきながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつな
ほぞ恋しき

といへりければ、「さればよ」といひて、男、

あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れて絶え
じとぞ思ふ

とはいひけれど、その夜いにけり。いにしへ、ゆく
さきのことどもなどいひて、

秋の夜の千夜を一夜になすらへて八千夜し寝ばや
あく時のあらむ

返し、

秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残して鳥
や鳴きなむ

いにしへよりもあはれにてなむ、通ひける。

検討すべき問題点はいくつかあるが、焦点である第一
の歌の「うきながら」について考えてみたい。諸注釈書

のほとんどは、これを男に対しての思いと解している。
いくつかの例を引いてみよう。³⁾

人をつらしとは思へども（肖聞抄）

つれなくて中絶えたまふはうきながら（新釈）

つらい方だと思いつつも（池田亀鑑・精講）

女にとつて男の心がつらいと思われるのに（上坂信

男・評解）

一緒に暮した時のあなたを、ひどいと思いがらも

（渡辺実・新潮古典集成）

あなたのなされかたをつらくは思いながら（大津有

一・新しい解釈）

ここの「憂し」は男の仕打を恨む気持であり、二人

の離別の原因には、男の浮気といった事情があつた

のであらう。（石田穰二・角川文庫）

男に対してという明示はないが、次の例も同じであらう。

一たび別れて後に、うき物には思ひはてたれども

（惟清抄・闕疑抄）

いやだと思いがらも、あなたを忘れることができ

ませんので（森茂・全釈）

管見に入った中で異なるのは、ただ一つ、由良琢郎氏の『伊勢物語講説』である。氏は「歌意」では「つらくも絶えているままで」とし、

わたしは「うきながら」は、「はかなくてたえにける」ままのいまの状態をさすものと思う

と述べ、諸注が男のことと解しているのを批判するが、特に「うし」の語義には言及していない。

この「うきながら」の歌は『新古今集』恋五にも収められているが、手近な古典文学大系や古典文学全集などを見ると、やはり「つらい方と思いながら」「薄情が辛いとは思いながら」と解するのが一般的のようである。

ただ、久保田淳氏の『新古今和歌集全評釈』は、歌意を「二人の間柄は憂くつらいものの」と取っており、注目される。

ところで、『新編国歌大観』によると、「うきながら」の句を用いた歌はかなりの数にのぼるが、八代集には右の『新古今集』の歌を含めて十一首が見える。

うきながらけぬる泡ともなりなむ流れてとだに頼まれぬ身は（古今集・恋五）

うきながら形見に見つる藤衣はては涙に流しつるかな（後拾遺集・哀傷）

水鳥の鴨のうき寝のうきながら波の枕に幾夜寝ぬらむ（新古今集・冬）

うきながらなほ惜しまるる命かな後の世とても頼みなければ（新古今集・雑下）

のように「浮き」と掛けたり、「はかなき身の上」や「はかなき命」との関わりで詠むものが多いが、次の二首は男女の仲に関するものである。

こと人をあひ語らふと聞きてつかはしける

よみ人しらず

うきながら人を忘れむことかたみ我が心こそ変らざりけれ（後撰集・雑四）

通ひける女のこと人にもものいふと聞きて、いひつかはしける
清原元輔

うきながらさすがにもの悲しきは今は限りと思ふ

なりけり（詞花集・恋下）

この二首には「こと人」に心変わりした相手をなお忘れがたく思っている（後者には「忘れがたい」という表現はないが、心底はそう解釈される）という共通性があり、『伊勢物語』二十二段の歌（「こと人」の存在の明示はないが）とも通うところがある。が、この二首の「うきながら」は、相手（の仕打ち）をつらいと恨んでいるのであるのか。後者について、新日本古典文学大系の『詞花和歌集』の注では「うき 女に軽んぜられた我身の情なさ」とし、相手とは解していない。

また、『堀河院艶書合』に見える四条宮甲斐の歌、

うきながら人もつらしと知りぬればことわりもなく

落つる涙か

は、「返し」から見ると「かりそめの絶え間」があったという状況（「こと人」の存在は明示されていない）であるが、「人もつらしと知りぬれば」と続いているので、「うきながら」は相手に向けられたものではなく、自身についての嘆きと見るべきであろう。

「うきながら」が相手のつれない仕打ちを恨んでいるのかどうか、「うし」の語義の検討を通して考察していきたい。

二 「うし」の語義

形容詞「うし」の語義については、「つらし」との対比において、西村亨氏・山崎良幸氏・原田芳起氏らによって明らかにされている。

西村亨氏は、和歌を例に取りながら、「前世から約束せられた宿命的な不幸、悲劇的な恋愛生活にあるつらさを形容することば」であり、「恋愛生活にある自分が相手から満足する処遇が与えられず、それも自分の宿世のつたなさであると、なかば諦め、なかば嘆くという態度である」と、説かれる。

また、山崎良幸氏は、『源氏物語』の「うし」一八六例のうち最も多い「世」や「身」に関する例について、「現実の私の生きざまの不幸を、いわば運命的に観じとる、そういう観想の表現」であり、それに次いで多い

「夫婦または恋愛関係における密通ないしはあだ心」に関する例について、「こういう事柄における私の思うにまかせぬ不幸を、前の場合と同様運命的なものとして観じとる、そういう観想の表現」であるとして、「憂し」は他者についての表現ではなく、もっぱら我にかかわる表現」であり、「口惜しくも情なく、ひたすら思いなげき、思い屈するよりほかない、そういう我に対する観想的表現」であると想定し、吟味を加え、その想定の際でないことを説かれた。

原田芳起氏⁷⁾の見解は、その発表の場の性格上、簡にしてお要を得たものである。

動詞「倦む」と同根であろう。情けなく苦しく思う自己感情を表し、他が我に対して、冷酷で無情であるという客体的感情を表す「つらし」とは、中古ではほぼ区別されていた。「人さへぞうき」の場合でも、他の「つらさ」に対する自己の苦しさ情けなさを表すとみるべきである。「いかでかく心一つをふたしへにうくもつらくもなして見すらむ」〈後撰・

恋一・五五六〉などの例は、両語に意味の区別があることを示す。「ま近くてつらさを見るはうけれどもうきはものは恋しきよりは」〈後撰・恋六・一〇四六〉も、典型的に意味の内と外とを区別している。平家物語ではこの区別が薄れて、「つらさ」と「うさ」がほぼ同様に用いられ、新古今和歌集でも「つらき人」と同じようなニュアンスの「うき人」がみえるようになる。この傾向から、「うし」は日常語彙から消えてゆき、「つらし」に併合されるに至ったとみることができる。

このような「うし」と「つらし」の語義の研究の成果は、注釈に取り上げられることもあるが、多くは留意せず、文脈や勘に頼って解釈したり現代語に訳しかえたりしている場合が多い。山崎氏は前掲書⁸⁾の中で、次のように述べておられる。

同じ「憂し」に対して、一つの注釈書は「厭だ」と解しているのに、他の注釈書は「薄情な、つらい」と解する、それは意識による相違としては片づけら

れない、もつと別の、いわば注釈における態度の問題が蔵されているのではないか。即ち「憂し」の意義に対する認識が不充分であつて、従つて文脈によつて安易に解釈する結果そうなるのではないかと察せられるのである。

具体例をあげてみよう。紀伊守邸に方違へした源氏が空蟬のもとに押し入つた場面で、

かくおし立ちたまへるを深く情なくうしと思ひ入りたるさまも、げにいとはしく心恥づかしきはひなれば（源氏物語・帚木）

を「思いやりなく情けないお仕打ち」^⑩と訳したのでは、空蟬の心情からずれてしまう。この「うし」は、このような「うき目」に遭う「うき身」としての宿命を痛感している心情の表現であらう。「情けない」の訳語は工夫されたものであるが、「お仕打ち」とつながると源氏に對する恨みが表に出てしまう。

いま一つ、夕顔の死後、右近の打ち明け話の中に、御名隠しもさばかりにこそはと聞こえたまひながら、

なほざりにこそ紛らはしたまふらめとなん、うきこ
とに思したりし。（源氏物語・夕顔）

とあるのは、なにがしの院で源氏の目に映つた夕顔のさま、

顔はなほ隠したまへれど、女のいとつらしと思へれ

ば（同）

とは明らかに違いがあるにもかかわらず、ともに「つらい」と訳するのは妥当でない。

当面の『伊勢物語』第二十二段の「うきながら」の場合も、「うし」の語義を深く考えることなく解釈したのか、先行研究のあることは知りながらも、この歌の場合には妥当しないと判断して取り上げなかつたのか、定かではないが、次のような見解が一般的な考え方であるかもしれない。

「つらし」は、他人の自分に対する仕打ちを薄情だ、ひどいと恨む気持、「うし」は、人を恨むのではなく、思うままにならず苦しい自分の身の上そのものを悲しむ気持という語である。したがって、「うし」

は「うき世」「うき宿世」などと、自分の運命のつたなさを嘆く場合に用いられることが多い。しかし、「天の戸をおしあけ方の月見ればうき人しもぞ恋しかりける」(新古今集・恋四・読人知らず)といった、「つらし」や「つれなし」とほとんど同じ意の「うし」もある。自分に憂い思いをさせる意から、無情だ、つれない、の意が生じたらしい。

「あり所は聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、なほ、うしと思ひつつなんありける」(伊勢物語・第四段)の「うし」は、手の届かない存在になってしまった二条の后に対する執着を断てない、自分自身に対する嘆きを表している¹²⁾が、「うきながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつなほぞ恋しき」(同・第三段)の「うし」は、「つらし」「つれなし」の意に近い。

「うし」と「つらし」の語義の違いを明らかにしながら、『新古今集』の「うき人」や当面の問題である「うきながら」については「つらし」や「つれなし」と「ほ

とんど同じ意」「意に近い」としたのは、書かれているように「自分に憂い思いをさせる」相手が考えられるからであろうが、どうしても「うし」の本来の意で解することはできないのだろうか。「うき人」の用例を中心に検討を加えることにしたい。

三 「うき人」と「つらき人」

『伊勢物語』第二十二段の「うきながら」の歌を「うき人」と関連させて解釈したのは、賀茂真淵の『伊勢物語古意』である。

「憂人しもぞ恋しかるらん」とよめる如く、うき人のしかもえみすてられぬ故に、かたへにはうらみながら、片心にはまだまだ恋しき也。上下同意ながら詞をかへて上の事を下にいてひとくやうによめる一の体也。

と記すのがそれであるが、「恋しかるらん」とする歌は未見である。あるいは先の引用の中にあつた『新古今集』の歌の記憶違いであろうか。

その『新古今集』の歌を、あらためて引用しよう。

天の戸をおしあけ方の月見ればうき人しもぞ恋しかりける（恋四・読人しらず）

この歌は、『源氏物語』賢木の巻の、

いとど世の中の常なさを思しあかしても、なほ「うき人しもぞ」と思し出でらるるおし明け方の月影にの本歌として古くから指摘されている。¹⁴「おし明け方の月影」ともかかわって都合の良い歌ではあるが、果たして古くからあつた歌かどうか。『源氏物語』以前に「うき人」の例を見いだすことは難しく、わずかに『古今和歌六帖』に、

君をのみおきふしまちの月見ればうき人しもぞ恋しかりける（第一・有明）

という歌を見るに過ぎない。¹⁵第三句以下まったく同じであり、古くから類歌があつたのかもしれない。

『源氏物語』以降には、「うき人」を用いた歌はかなり多い。二三の例をあげる。

秋風のうき人よりもつらきかな恋せよとては吹かざ

らめども（千載集・恋四・空人法師）

さらでだに別れをいそぐうき人の心にかなふ鳥の声かな（続千載集・恋三・民部卿実教）

うき人の心の関となりはてて猶こえがたき逢坂の山（新拾遺集・恋一・平重基）

うき人を忘ればてなで忘れ川なにとて絶えず恋ひわたるらむ（内大臣家歌合・元永元年十月・忠房朝臣）
相逢う前にも、逢うて別れる朝にも、途絶えた後にも用いており、自分に「うき」思いをさせる人のことではあるが、果たしてそれは「つらき人」とおなじであろうか。『千載集』の例のように「つらし」と共に用いた例もあることに注目しておきたい。

「つらき人」の例は古くから見える。これも二三の例をあげる。

こちそこなへりける頃、あひ知りて侍りける人の訪はで、こちおこたりて後、とぶらへりければ、詠みて遣はしける 兵衛

死出の山ふもとを見てぞ帰りにしつらき人よりまづ

越えじとて（古今集・恋五）

我といかでつれなくなりて心みむつらき人こそ忘れ
がたけれ（後拾遺集・恋四・和泉式部）

何ごとにつけても見まさは難き世なめるを、つら

き人しもこそと、あはれにおぼえたまふ人の御心ざ

まなる。（源氏物語・葵）

すべて自分に対して薄情でつらい思いをさせる人のこと
であり、その限りでは「うき人」との差はないように思
われる。

ところで、先の「うき人」で引いた『源氏物語』賢木
の巻の例は、かたくなに避け続け出家を決意している藤
壺に対する源氏の思いであるが、「つらき人」で引いた
葵の巻の例は、求婚を受け入れない朝顔の宮に対する源
氏の思いである。同じく思いがかなえられない相手では
あるが、その関係には明らかに違いがある。藤壺との関
係は、ただ相手の態度や対応を恨むのではなく、このよ
うな思いをするに到った宿命・宿縁を痛感させられるも
のである。つまり、「つらき人」は相手の仕打ちをつら

いと感じ表現するもの（薄情な人、冷淡な人）であり、
「うき人」は思うようにならぬことを自らの運命や宿縁
と感じ表現する（「うき身」「うき世」と痛感するきつ
けとなった人）という違いがある、と解しうるのではな
いか。

「うき人」に似た表現に「うきもの」がある。

兵部卿のみこ、年ごろの御心ばへのつらく思はずに
て、ただ世の聞こえをのみ思し憚りたまひしことを、

おとどはうきものに思しておきて、昔のやうにも睦び

きこえたまはず。（源氏物語・潘標）

宮の「心ばへ」を「つらし」「思はずなり」と感じてい
ることは明らかであるが、「うきもの」と思しておきてを
「源氏はそれをつらいし打と根に持つて」という直接的
な解をすべきではなく、やはり「我が身」のありように
関わる思いと取るべきであろう。とすれば、対象や状況
は同じであっても、その感じ方、表現の仕方によって
「うし」と「つらし」は使い分けられているということ
になる。

「うき人」以外の、相手との関わりで用いられた「うし」についても、同様に解して良いと考える。例えば、桐壺院崩御ののち、三条邸に下がってきた藤壺の寝所に源氏が近づき、「まねぶべきやうなく聞こえつづけ」るが、藤壺は「こよなくもて離れ」「はてはては御胸をいたうなやみ」、思いを遂げられないという場面での源氏の心中は、次のように描かれる。

男は、うしつらしと思ひきこえたまふこと限りなきに、来し方行く先かきくらす心地して、うつし心失

せにければ（源氏物語・賢木）

「思ひこえたまふ」と、藤壺を対象にした表現ではあるが、「宮のお心をただどこまでもつらく恨めしくお思い申しあげて¹⁷」という訳では、源氏の真情は十分には伝わらない。「うし」は自らの運命について、「つらし」は藤壺の対応についての思いであることを、注で説明することが望ましい。

いま一つ、取り上げてみたい。

大和の国に、男女ありけり。年月かぎりなく思ひて

すみけるを、いかがしけむ、女をえてけり。なほもあらず、この家に率て来て、壁をへだててすゑて、わが方にはさらに寄り来ず。いとうしと思へど、さらにいひもねたまず。（大和物語・一五八段）

後に「いひもねたまず」とあるところから見ても、「うし」は夫の仕打ちをつらく思うのではなく、身のつたなさを嘆くと解さなければならない。

四 「うきながら」再考

「うし」と「つらし」の語義について、先行研究を参考にしつつ考察し、両者には違いがあることを確認してきた。この結果に基づけば、『伊勢物語』第二十二段の「うきながら」の歌は、男（の仕打ち）を恨むのではなく、二人の仲の絶えたことを「うき身」のゆえと観じ「うき世」であったと諦めてはいるが、それでもやはり「人をばえしも忘れ」ることができない、と解さなければならぬ。諸注釈の中ただ一つ他とは異なっていた由良氏の「つらくも絶えているままで」という解は、なお

十分とは言えないが、先に引いた久保田淳氏の『新古今集』の歌の解釈の「二人の間柄は憂くつらいものの」「は「うし」の語義を押えたものと言えよう。

『源氏物語』で、源氏が須磨から帰京しても「さらに思ひ出でたまふけしきも見えで」苦しくつらい日々が続いている時の末摘花の思いを、

あはれに心深き契りをしたまひしに、わが身はうくて、かく忘られたるにこそあれ、風のつてにても、

我かくいみじきありさまを聞きつけたまはば、必ずとぶらひ出でたまひてん（源氏物語・蓬生）

と書いているが、これと同じような心情であると言つてよい。また、先に引用した「うきながら」や「うき人」の例歌の中に、「うきながら人を忘れむことかたみ」とか「うき人を忘れはてなで」とか、歌われているのとも相通じる。

「うし」を右のように解した場合、なお残る問題は、「はかなくて絶えにける仲」の解釈であろう。諸注釈書の「はかなくて」の解を整理すると、大きくは次の二つ

に分類できる。

1 仲が絶えた理由と解する

さしたる恨などありて絶えたるにはあらざる也（拾穂抄）

格別な理由もなくという程の意。前段に「いかなることかありけむ、いささかなることにつけて」とあるのと同様の事情である。（石田穰二・角川文庫）僅かなことがもとで（大津有一・築島裕・岩波古典大系）

2 二人の間柄と解する

はかばかしくあふ事もなくて絶えたる中なり（勢語臆断）

むなしい状態で、あつけない状態で、取り立てていうほど進捗していない状態で、と解すべきである。

「訳」思うようにはかばかしく逢うこともできない状態度。（竹岡正夫・全評釈）

さして愛情も深くないままに絶えてしまった（福井貞助・新編日本古典文学全集）

長続きせずにいつのまにか男との縁が切れてしまつた（森野宗明・講談社文庫）

薄い縁のまま（渡辺実・新潮古典集成）

なお、折口信夫氏（全集ノート編）は、「ちよつとしたことで、なんでもないことで」と訳をつけ、語釈では「二人の関係は、男がちよつとしたよそ心もち、そのためにとぎれて、女が逢わなかった」とし、阿部俊子氏（全訳注Ⅱ講談社学術文庫）は、「直接には縁の切れ方に、はっきりした十分の理由がないことをいうと見ていいが、しかし縁が切れる前の二人の関係が深く根強いものでなかったという下地があったからこそ、ふとしたことで別れるようになったのであろう」とし、1と2と重なる解釈をしている。

「はかなくて」を、男女の仲について用いた例として、次のようなものがある。

八月より絶えにし人、はかなくて、正月にぞなりぬるかしと、おぼゆるままに（蜻蛉日記・下・天延二年一月）

この世はかうはかなくて過ぎぬるを（源氏物語・柏木）

この「浮舟ノ」はてのわざなどせさせたまひて、はかなくてもやみぬるかなと、あはれに思す。（源氏物語・手習）

第一例は夫との関係が途絶えたままであることを述べたものの、第二例は柏木の心中、第三例は薫の心中であるが、それぞれ、数度の逢う瀬でしかなかった女三の宮との関係、六か月の間に数回しか逢っていない浮舟との関係、回想しているものである。『伊勢物語』第二十二段の例もまた、深く愛し合っているという手ごたえがなく、どうなっていくのか頼みどころのない、不安定な関係を表現したものと解すべきであろう。

「うきながら」を男に対する恨みを直接的に表現したものではないと解したとと合わせて考えると、男の通いが絶えてしまい、女はわが身の「うさ」と思ひはするが、やはり忘れられない、その思いを訴えた歌である、ということになる。とすれば、「さればよ」という男の

つぶやきは、「それみたことか」とか「いささか得意になつて」¹⁹とか解すべきではなく、「そうだったのか」と女の思いと人柄をあらためて感じての言葉であり、その思いを即座に「あひみては」の歌に詠んで贈るが、言葉だけではなく、実際に行動に移し「その夜いにけり」ということになった、と解釈できる。そのような読み方をすれば、後半の「秋の夜の」の贈答も、よりふさわしいものとして位置づけられると考える。

おわりにー 第二十一段との関係

「うきながら」の歌の解釈を見直すことによって、『伊勢物語』第二十二段の男と女の人柄も思いも、従来の解釈とは異なる結果となった。このように解釈することによって、第二十一段との関係もまた、若干異なつてこよう。

第二十一段は、「かしこく思ひかはして、こと心なかりけ」る仲であつたのに、「いささかなることにつけて、世の中をうしと思ひ」出ていった女が、「いと久しくあ

りて、念じわびて」歌をやる。

今とはとて忘るる草の種をだに人の心にまかせずもが
な

私のことを忘れないで、というのである。これに対して、男は、

忘れ草植うとだに聞くものならば思ひけりとは知り
もしなまし

「忘れないで」ではなく、あなたのことが忘れられない
と言うのならまだしも……と言いつ返すが、「またまた、
ありしよりもけにいひかは」すことになる。しかし、結
局は「おのが世々になり」「うとく」なつてしまった、
というのである。

従来も結末が対照的であることについての言及はなさ
れている。例えば、賀茂真淵の『古意』には、

はかなき事に付て絶たるが、女の許より二たび云お
こせたるさまなど似たれば、ならべ拳し物にて、且
前なるは終に逢ず、こは又あへるなれば別条也。

とあり、由良琢郎氏²⁰はこれを引用して、

はじめ似ていると思わせながら、末がちがってくる。ところに、『物語』を読むおもしろさもあるのである。

と説かれる。

しかし、これまで検討してきた解釈によれば、「しかしく思ひかはして、こと心なか」った仲と、「はかなくて絶えにける仲」とも対照的であると解されるので、二つの段の関係は、さらに「おもしろさ」をますことになろう。しかも、「世の中をうし」と観じていたのに、「忘る」という語を持つ歌（内容としては逆だが）をきつかけに再び関係が戻るといふ共通点を持ちながら、結末は異なるという対照の妙もある。

さらに、第二十三段（筒井筒）とも、歌によって女の思いと人柄に感じ入り、愛のきづなが強まったという点において、関連を持つことになる。⁽²¹⁾

〔注〕

(1) 『伊勢物語全釈』一六六ページ。

(2) 本論文に引用する本文は、原則として「(新編)

日本古典文学全集」「新編国歌大観」(八代集は「新日本古典文学大系」)によるが、表記を一部改めたところがある。

(3) 注釈書名は略称による。

(4) 校注は工藤重矩氏。

(5) 『王朝恋詞の研究』(昭和四七年)第八章(「うし」の項)。

(6) 『源氏物語語義の研究』(昭和五三年)第三篇第一章「憂し」と「物憂し」「心憂し」の意義。

(7) 『古語大辞典』(小学館)昭和五八年)の「うし」の「語誌」。なお、原田氏は早く「国文学解釈と鑑賞」(昭和三四年一〇月・秋の臨時増刊)の「源氏物語重要語句の詳解」において、「うし」の項を担当し、言及しておられる。他に、『源氏物語必携』

(昭和四二年)の「源氏物語語彙辞典」(石川徹氏の

担当)や「国文学」(学燈社)平成三年五月臨時増刊)の「古語の宇宙誌」(小町谷照彦氏の担当)などにも指摘がある。

- (8) 新日本古典文学大系の『後撰和歌集』(片桐洋一氏校注)の五五五・七四九や『詞花和歌集』(工藤重矩氏校注)の一九八など。日本古典文学全集の『源氏物語』竹河の巻(五一一〇〇ページ)。新編日本古典文学全集の『蜻蛉日記』二六九ページや『源氏物語』落標の巻(二二二九九ページ)など。

(9) 注6に同じ(一九八ページ)。

(10) 新編日本古典文学全集の現代語訳(二二一〇〇ページ)。

(11) 『竹取物語伊勢物語必携』(昭和六三年)の「竹取物語・伊勢物語要語解説」の「うし」の項(池田節子氏の担当)。

(12) この例を、『岩波古語辞典』が、「②△自分に憂いを思いをさせる意から▽恋愛の相手の態度が無情だ。つれない」の意として引いているのは適当ではない。

(13) 先に引用した原田芳起氏も、「新古今和歌集でも『つらき人』と同じようなニュアンスの『うき人』がみえる」とされる。

(14) 『源氏釈』『奥入』『紫明抄』をはじめ現代の注釈書まで、多くの書がこれを本歌としている。

(15) 『宇津保物語』忠こそその巻に、「いでや、きこえじと思へど、はてうき人はいふめれど、きこえではえあらぬものなめれば」という例があるが、日本古典文学大系は「訪はでうき人は」と訂して読んでいる。

(16) 『対校源氏物語新釈』の傍注(二二二二五ページ)。

(17) 新編日本古典文学全集の現代語訳(二二一〇七ページ)。

(18) 『新しい解釈』『全釈』『新潮古典集成』など。

(19) 『全訳注』など。

(20) 『伊勢物語講説』上・一五五ページ

(21) 新編日本古典文学全集の注(福井貞助氏)に、「このあたり、男女離合のさまざまな姿が、交しあ

う歌を軸にして語り続けられているが、次の段（二十三段をさすⅡ引用者注）は、その種のを発展させた物語ともなっている」とある。